西洋文学移入一斑
――ローデンバック詩の邦訳――

村　松　定　史

はじめに

明治の開化とともに西欧文学が怒濤のように我国に流入して来た。『明治翻訳文学全集』(1) など最近の綿密で網羅的な仕事は，その実際をいっそう明らかにしつつある。流入の多彩な潮流の中で，細く長く読み継がれているフランス・ベルギー象徴派詩人ローデンバック詩の受容の流れをここではたどる。近代文学におけるそれは西洋文芸移入の好個の例であるにとどまらず，日本近代詩への濃い影響を跡づける端緒ともなろう。

ヨーロッパの詩歌を翻訳紹介した書物の嚆矢といえば，明治38年の上田敏『海潮音』(2) である。質量ともに今日に至るまで，これに比肩しうる訳詩集は数えるほどしかないと言ってよい。フランス，ドイツ，イギリス，イタリアなどの29詩人，57編の訳詩の流麗高雅なことは今さら述べるまでもあるまい。ここに論ずる詩人ローデンバックは，同書の「序」で「仏蘭西詩壇の新聲」として，ヴェルレーヌ，ヴェラーレン，マラルメと並んで紹介されている。『海潮音』訳載のローデンバック詩は「黄昏」1編であるが，その名訳のおかげで，以後，日本ではこの詩人への熱烈な愛読者を多数獲得することとなる。

ジョルジュ・ローデンバック Georges Rodenbach（1855～1898）はベルギーに生まれ，古き佳きフランドルの伝統や風物を詩にうたう一方，パリに出て象徴派詩人たちと交わり，その親交から一段と詩法を磨き，表象の技法を研ぎすまして行く。また，小説『死都ブリュージュ』*Bruges-la-Morte*（1892）(3) は，フランスの代表的な日刊紙「フィガロ」に連載(4) の後，ベルギーの古都ブリュージュの風景写真35葉を挿入して上梓され，非常な成功をおさめる。さらに2年後，韻文戯曲『ヴェール』*Le Voile*（1897）(5) のコメディ・フランセーズでの上演が，その地歩をいっそう確かなものとした。詩集の代表的なものに，『白い青春』*La Jeunesse blanche*（1886，1913），『静寂の国』*Le Règne du silence*（1891），『眼の中の旅』*Le Voyage dans les yeux*（1893），『閉ざされた生活』*Les Vies encloses*（1896）などがある。

こうしたローデンバック文学の我国においての翻訳や紹介の概要は，すでに小著『日本におけるジョルジュ・ローデンバック』（1998）(6) ほかで述べてきたが，本論では対象を訳詩にしぼり，原詩との対比や，翻訳の成立状況などを検討して行きたい。新資料も含め遺漏も補って行くこととなろう。

別表1「ローデンバック訳詩年表」にしたがい，発表順，翻訳者別に論を進めて行く。別表1は，左から，まず原詩の収録詩集，次に訳されたものの原詩タイトル，そして編年的に訳者と訳題を略記した(7)。

「収録詩集・作品集・詞華集」は，翻訳者が典拠としたと思われる原著書，撰集等を発行年順に掲げた。ただし英語やドイツ語の刊本は除き，フランス語のものも評論や研究書等は挙げていない。

別表1　ローデンバック訳詩年表

収録詩集	原詩タイトル	1905 (明治38)	1907 (明治40)	1908 (明治41)	1909 (明治42)	1920 (大正9)	1924 (大正13)	1927 (昭和2)
Les Tristesses 1879　(明治12)	Le coffret							
La Jeunesse blanche 1886　(明治19)	Les jardins							
	L'absence							
	Vieux quais							
	La pluie			内藤水翟 「雨」			鈴木信太郎 「雨」	
	Vers d'amour II 1886　(明治19)					矢野目源一 「愛詩」		
Le Règne du silence 1891　(明治24)	Le cœur de l'eau XII							
	Paysages de ville XV							
	Cloches du dimanche II							
	XIV							
	Du silence II	上田敏 「黄昏」						
	IV		内藤水翟 「白影」					
	V							
	XIV		内藤水翟 「秋愁」					
	XV							
	XVI		内藤水翟 「月光」					
	XVII			折竹蓼峯 「ゆふ雲」				
	XXIV				内藤水翟 「鐘楽」			西條八十 「田舎で」
Les Vies encloses 1896　(明治29)	Le soir dans les vitres V							
	Les lignes de la main II							
	Les malades aux fenêtres II							
	Le voyage dans les yeux XVIII							
	La tentation des nuages II							
	IV							

1928 （昭和３）	1929 （昭和４）	1930 （昭和５）	1933 （昭和８）	1943 （昭和18）	1946 （昭和21）	1954 （昭和29）	1959 （昭和34）	1982 （昭和57）	1985 （昭和60）	1989 （平成１）
										窪田般彌 「小箱」
	前田鐵之助 「庭」									
					青柳瑞穂 「不在」					
							安藤元雄 「古い河岸」			
							安藤元雄 「雨」			
									小浜俊郎 「水の心」	
			矢野峰人 「廃都」							窪田般彌 「おお都市」
									小浜俊郎 「日曜は」	
									小浜俊郎 「地方で」	
								安藤孝行 「たそがれ」		
			矢野峰人 「鏡」							
		前田鐵之助 「沈黙」								
大木篤夫 「田舎の町に」									小浜俊郎 「田舎では」	
					青柳瑞穂 「夕暮」					
				矢野峰人 「掌文」						
						齋藤磯雄 「われと」				
						齋藤磯雄 「女人ら」				
		前田鐵之助 「雲の誘い」								
		前田鐵之助 「雲の誘い」								

19世紀末から20世紀にかけての詩撰集の類いは多数にのぼる。ここでは，訳された原詩を含むもので，入手，閲覧しえたもののみ掲げた。それぞれの原詩がいずれの典拠に拠るものかの推定は，このリストの番号①～⑰で示して行くこととする。

明治から大正にかけて原詩集を確かに手に取ったと確認される翻訳者はいないし，ローデンバックの単独詩集や作品集を参照したとはむしろ考えにくいが，いずれの原詩集も翻訳がなされる前に刊行されていることは確かなのでリストには掲げてある。ローデンバックの「全集」が刊行されるのは，次に示す通り平成に至ってからのことである。

Georges Rodenbach, Œuvre complète, Tome I, Tome II. Bruxelles : Le Cri, 2000.

別表2「収録詩一覧」は，訳出された詩の原典が収録されている詩集，撰集を，リストの①～⑰の刊行順に示し，どの刊本に，どの詩が収載されているかを示した。各詩所収の①，②，③，④，⑤，⑥，⑨の単行詩集と作品集⑫，⑬，⑰に該当の詩が含まれていることは自明のことだが，どの詞華集にどういった詩が撰定されているかは閲するに値しよう。

1．明治～大正時代

上田敏「黄昏（たそがれ）」　　『海潮音』本郷書院　1905年（明治38年）10月13日

上田敏はすでに明治28年に「帝国文学」に掲載した「白耳義文学」[8] でローデンバックの戯曲 *Le Voile* 他に言及しており，これが日本にローデンバック文学を伝えた最初と考えられる。これは同時代にパリを舞台に活躍するベルギー詩人としての紹介であり，この後も，メーテルランクやヴェラーレンとともに紹介は続く。だが，この「黄昏」が訳された明治38年は，詩人の没した1898年の7年後ということになる。

上田敏はまず「明星」巳歳第6号にこの訳詩を掲載[9]。不備を補って同年『海潮音』にこれを収録する。「黄昏」は詩編〈Du silence〉II章（4行×5連）の訳である。安田保雄によれば原詩の典拠は，⑦ *Poètes d'aujourd'hui, 1880-1900, morceaux choisis* によるもの[10]。

詩編〈Du silence〉は，1888年，単独の小型本③ *Du Silence* として刊行され，3年後，1891年，④ *Le Règne du silence* に収録される。しかし，『海潮音』には数カ国30人近い詩人の訳詩が網羅されているわけで，個々の単独詩集よりは，アンソロジーか，引用を含む研究書等を参考にしたと見るのが普通であろう[11]。

上田敏が参照したと推定される⑦ *Poètes d'aujourd'hui, 1880-1900, morceaux choisis* は，1900年の初版の後，重版をかさね，1925年版ではかなりの増補がなされている。34詩人がそれぞれ数編ずつの収録だったものが，各詩人2，3編から10編ほども詩が増加され，詩人の数もあらたに18人を加えている。ただしローデンバックに関しては，初版の時から「黄昏」の原詩ほか9編が収録されており，後年の版にも変更はない。

「黄昏」の原詩〈Du silence〉II章は，⑦のみならず⑪，⑭，⑯の撰集にも収められている名詩にの一つで，〈Du silence〉の全26章のうちでも最もよくローデンバックの幽艶な詩境を示している。いずれの撰集も，〈Douceur du soir〉の題で収録しているが，これは第1行目〈Douceur du soir ! Douceur de la chambre sans lampe !〉の冒頭を採ったもの。上田敏が訳題を「黄昏」としたのは，このII章の趣向を詩的に要約したものである。

収録詩集・作品集・詞華集

①1879（明治12年）	***Les Tristesses***. Paris : A. Lemerre.
②1886（明治19年）	***La Jeunesse blanche***. Paris : Alphonse Lemerre.
③1888（明治21年）	***Du Silence***. Paris : Alphonse Lemerre.
④1891（明治24年）	***Le Règne du silence***. Paris : G. Charpentier.
⑤1893（明治26年）	***Le Voyage dans les yeux***. Paris : Paul Ollendorff.
⑥1896（明治29年）	***Les Vies encloses***. Paris : Charpentier et Eugène Fasquelle.
⑦1900（明治33年）	*Poètes d'aujourd'hui, 1880-1900, morceaux choisis*, Tome II par Ad. van Bever et Paul Léautaud. Paris : Société du Mercure de France.
⑧1903（明治36年）	*Anthologie des écrivains belges de langue française : Georges Rodenbach* par L'Editions de l'association des écrivains belges. Bruxelles : Dechenne et Cie.
⑨1913（大正 2 年）	***La Jeunesse blanche***. Paris : Charpentier et Eugène Fasquelle.
⑩1917（大正 6 年）	*Anthologie des écrivains belges, poètes et prosateurs*, Tome I par L. Dumont-Wilden. Paris : Georges Crès.
⑪1919（大正 8 年）	*Anthologie des poètes français contemporains* (*1866-1914*), Tome II par G. Walch. Paris : Delagrave.
⑫1923（大正12年）	*Œvres de Georges Rodenbach*, Tome I. Paris : Mercure de France.
⑬1925（大正14年）	*Œvres de Georges Rodenbach*, Tome II. Paris : Mercure de France.
⑭1927（昭和 2 年）	*Bouquet de Roses*［佛蘭西小詩選］par T. Kobayashi et T. Kambé. Tokyo : Futsugo-Kenkyusha.
⑮1936（昭和11年）	*Pages choisies des écrivains français de belgique, poésie-théâtre-essais, 1880-1936* par L. Demeur et G. Vanwelkenhuyzen. Bruxelles : Libr. Vanderlinden.
⑯1948（昭和23年）	*Choix de poésies de Georges Rodenbach*. Préf. de Louis Piérard. Notice biographique de Pierre Maes. Paris : Charpentier et Fasquelle.
⑰1978（昭和53年）	*Œvres de Georges Rodenbach*, Tome I-II. Réimpression de l'édition de Paris 1923-1925. Genève : Slatkine.

別表 2　収録詩一覧

収録詩集	原詩タイトル	①1879	②1886	③1888	④1891	⑤1893	⑥1896	⑦1900
Les Tristesses 1879　(明治12)	Le coffret	◇						
La Jeunesse blanche 1886　(明治19)	Les jardins		◇					
	L'absence		◇					
	Vieux quais		◇					
	La pluie		◇					
	Vers d'amour II 1886　(明19)							
Le Règne du silence 1891　(明治24)	Le cœur de l'eau XII				◇			
	Paysages de ville XV				◇			○
	Cloches du dimanche II				◇			
	XIV				◇			
	Du silence II			◇	◇			○
	IV			◇	◇			
	V			◇	◇			
	XIV			◇	◇			
	XV			◇	◇			
	XVI			◇	◇			
	XVII			◇	◇			
	XXIV			◇	◇			○
Les Vies encloses 1896　(明治29)	Le soir dans les vitres V						◇	
	Les lignes de la main II						◇	
	Les malades aux fenêtres II						◇	○
	Le voyage dans les yeux XVIII					◇	◇	○
	La tentation des nuages II						◇	
	IV						◇	

⑧1903	⑨1913	⑩1917	⑪1919	⑫1923	⑬1925	⑭1927	⑮1936	⑯1948	⑰1978
○		○	○			○		○	
	◇			◇					◇
	◇			◇					◇
○	◇	○	○	◇				○	◇
	◇	○	○	◇				○	◇
	◇			◇					◇
				◇					◇
				◇					◇
				◇					◇
				◇					◇
				◇					◇
			○	◇		○		○	◇
				◇				○	◇
				◇				○	◇
				◇					◇
				◇					◇
				◇					◇
				◇					◇
			○	◇		○			◇
					◇			○	◇
					◇			○	◇
					◇		○	○	◇
					◇				◇
					◇			○	◇
					◇			○	◇

ところで日本にはじめてローデンバックの名を知らしめた，先述の「白耳義文学」という6ページほどの記事は，6年後の1901年，『文芸論集』[12] に収録される。その際，「(補遺)」として，8ページほど新たにベルギー文学の動静を伝える文章を加える。その中で，ローデンバックの主要数作品を挙げた後，「短けれど，次の抜粋は彼が特調を伝ふに足らむ。」として，「黄昏」の原詩から第1，2，4，5連を原文で引用している。

これこそローデンバック文学の真髄と見抜いた上田敏の慧眼はまことに称すべきところだが，ローデンバック詩の我国における最初の紹介にこの詩が選ばれたことと，上田敏という卓越した訳者を得たことは，非常な幸運であったと言わざるをえない。今日に至るまで，ローデンバック詩を愛読する人のきっかけは大方この訳詩によるものであり，確かにこれがローデンバック詩の本質を凝縮して伝える最上の1編であったことに異を唱える者はいまい。そして，「黄昏」の明治以降の近代詩への反映も少なからず論議されているところだ[13]。矢野峰人は『海潮音』が，蒲原有明の『春鳥集』よりも『有明集』(1908) へとより強く及んでいると指摘している[14][15]。

翻訳上の精密にして流麗な工夫は多々散見されるが，たとえば，原詩に繰り返される〈douceur〉の語は「蕭(しめ)やかさ」と訳されている。冒頭第1行目の訳は，「夕暮(ゆふぐれ)がたの蕭(しめ)やかさ，燈火(あかり)無(な)き室(ま)の蕭(しめ)やかさ。」とある。〈douceur〉には心地よさ，穏やかさに加えて，おとなしさ，密やかさの含みもある。ひっそりともの静かで，しんみりともの悲しくさえある「蕭(しめ)やかさ」の語を当てるということは，そこまで意味を掘り下げた妙訳といえる。

また第2連の1〜2行は「物静(ものしづ)かなる死(し)の如(ごと)く，微笑(ほゝゑみつく)作るかはたれに，／曇(くも)れる鏡(かがみ)よく見(み)れば，別(わかれ)の手振(てぶり)うれたくも」とあるが，自分の影が薄れてゆく寂しさ，訣別への苛立ちを「うれたし」の語で補い訳しているあたりも妙技といえるだろう[16]。矢野峰人は後年，随所の「繊細巧妙の筆致」を「神技」とまで絶賛している[17]。

「黄昏」に心酔し，ローデンバックへと目を開かれた近代日本の学者，文人のいかに多かったかは，この幕開けにつづく詩，小説，戯曲の連綿とつづく翻訳や評論からもうかがえよう。

内藤水翟「秋愁」「月光」	「帝国文学」第13巻第10号	1907年（明治40年）10月10日
「白影」	「帝国文学」第13巻第12号	1907年（明治40年）12月10日
「雨」	「帝国文学」第14巻第12号	1908年（明治41年）12月10日
「鐘楽」	「帝国文学」第15巻第12号	1909年（明治42年）12月1日

「白影」「秋愁」「月光」「鐘楽」は，それぞれ〈Du silence〉のⅣ章（6行・18行），XIV章（4行×4連），XVI章（4行×2連），XXIV章（12行）で，「雨」は詩集② *La Jeunesse blanche* 中の〈La pluie〉（5行×5連）の訳。これらのうち，先の上田敏が参照したとされる⑦*Poètes d'aujourd'hui, 1880-1900, morceaux choisis* には〈Du silence〉のⅡ章とXXIV章しか含まれていないから，内藤は他の本に拠ったものと思われる。

内藤訳の詩を含む② *La Jeunesse blanche*，③ *Du Silence*，④ *Le Règne du silence* の各詩集は1907年までに刊行されているものの，作品の選別状況から見て，アンソロジー他によったと考えるのが妥当だろう。

内藤濯(あらう)（本名）は，後に訳詩集『形影集』（昭和28年）[18] を刊行する際，これら〈Du silence〉の4編のタイトルを，それぞれ「室には光うすれしを」「悲しさや」「月光」「野の里の……」とし，

内容を印象的に要約したものから，ほぼ各詩冒頭の一句に改め，訳文にも少し手を入れている。たとえば，初出で「白影」と題したものが，「室には光うすれしを，窓のとばりのほの白く」と加筆した第1行目前半を訳題とする，といった具合である。

ところで「雨」は，内藤訳と前後して，永井荷風が随筆中でその一部を対訳で紹介している[19][20]。そこで引用されているのは，第3連3〜4行と第5連4〜5行。後者の末尾2行を比較して示そう。

（原詩）

Notre âme, elle n'est plus qu'un haillon sans couleurs

Comme un drapeau mouillé qui pend contre sa hampe !

（永井荷風訳）

人の心は旗竿より濡れて下りし

其の旗の色とてもなき襤褸なりけり

（内藤　濯訳）

うつし世の霊，今ははや，色彩あせし襤褸のみ，

竿にかゝれる旗しとゝ濡つとばかり。

内藤訳が日本の詩歌の伝統的な叙情性によった詠嘆型の訳であるのに対し，荷風はより直截に訳すことで，むしろローデンバックの象徴性を浮き彫りにしている。我国の近代詩に大きく影響した西洋詩移入の二つの側面がここに見て取れよう。翻訳の持つ功罪にも，これは及ぶ問題と言えるかもしれない[21]。

折竹蓼峯「ゆふ雲」　　「帝国文学」第14巻第6号　1908年（明治41年）6月10日

折竹錫（本名）による〈Du silence〉XVII章（22行）の邦訳。「しめやかに香の燻りの舞ふに似て／日は濕ひのゆふ霧の夢と淡けく消えしづむ。」と始まり，「ゆふ暮」やそれに類する言葉は繰り返されるものの，訳題に当る語は詩の中にない。イメージでつけたにしても，暮れて行く街の魂をうたう内容とはややずれていよう。

この訳詩の翌1909年に「帝国文学」に執筆の評論で，〈Du silence〉から2連を対訳で引用している。XIX章（4行×6連）の第1〜2連である。この評論「『憂愁』と『古代』と『宗教』と」[22]の初めで折竹は自分の種本が次の書であると述べている。

DOUMIC, René. *Les Jeunes*. Paris : Perrin, 1896.

矢野目源一「愛詩」　　「詩王」3月号　第2年第3輯　1920年（大正9年）3月5日

〈Vers d'amour〉II章（4行×3連）の訳で，「詩王」掲載の翌年，『現代詩集・第1輯』[23]に再録。題は思いきった直訳で，訳詩は「沈黙と薫香の織りなせる青薄紗の漂へる／御寺に歩み入る如く美しの君の愛に入る，」と始まる。

ローデンバックは1884年に *Vers d'amour* の題で10編からなる薄い詩集を出す。

Vers d'amour. Bruxelles : Bureau de *La Jeune Belgique*, 1884.

ところが，これとは全く別の10編の詩を1885〜6年に書き，これも同じ〈Vers d'amour〉の題でまとめている。ここに訳されているのは後者のII章である。この詩編は② *La Jeunesse blanche*（1886）を増補した⑨ *La Jeunesse blanche*（1913）刊行の際に収録されたもの。〈Vers d'amour〉

は撰集等に取り上げられることがあまりない詩編で，⑨からの訳出と考えられそうだ。この詩編からの翻訳，紹介は今日に至るまで，この1編のみである。

鈴木信太郎「雨」　　『近代佛蘭西象徴詩抄』春陽堂　1924年（大正13年）9月15日

内藤訳および荷風の部分訳のある② *La Jeunesse blanche* 中の〈La pluie〉の翻訳。鈴木信太郎はどの原書によったかは示していないが，〈La pluie〉は，1917年刊の⑩ *Anthologie des écrivains belges, poètes et prosateurs* にも，1919年刊の⑪*Anthologie des poètes français contemporains* (*1866-1914*) にも収録されている代表作の一つ。

「あはれ，雨よ，あはれ，雨よ，あはれ，細く静かに降る／水の絲目(いとめ)は，『歳月(としつき)』の黒き苧玉(をだま)に繰(く)られては，」と始まる鈴木信太郎訳は，この後も幾度となく名詩選などに再録されて広く読まれる。上田敏の「黄昏」と並んで，その上質な訳詩は，さらにローデンバック愛読の士を増加させる大きな力となったことは疑いを入れない。

訳詩の後に，ベルナール・ラザールの小文「ロオデンバッハの世界」を訳載しているから，すでに上田敏が「購入，参照していた」[24] 次の書を鈴木信太郎も読んでいたことになる。

LAZARE, Bernard. *Figures contemporaines*. Paris : Perrin, 1895.

また，この『近代佛蘭西象徴詩抄』中のステファヌ・マラルメの項で，鈴木信太郎はローデンバックのマラルメ評からの一部を引用している。このマラルメ評は次の書に含まれている。

L'Elite. Paris : Charpentier et Eugène Fasquelle, 1899.

詩人や画家など26人の同時代の芸術家たちを論じたローデンバックの評論集『エリート』にも目を通していたということになろうか。このローデンバックによるマラルメ評の初出は「フィガロ」紙[25] だが，新聞紙上よりは *L'Elite* で読んだと考える方がむろん自然であろう。

2．昭和～平成時代

西條八十「田舎で」　　『丘に想ふ』交蘭社　1927年（昭和2年）11月5日

随想集『丘に想ふ』所収の「鐘の音」の中で〈Du silence〉XXIV章を自由訳したものだが，渡仏をはさんでローデンバックを愛吟していたことは，「外国の詩の話」[26] やこの随想で繰り返し八十は述べている。『丘に想ふ』の「はしがき」によれば，「鐘の音」はラジオ講演の筆記（日付不明）で，話の初めで「耳で聞いた旅の印象」を語りたいと述べている。2年間のフランス滞在から戻ってすでに1年が経過しているが，ヨーロッパで聞いた「カリヨン」（「衆鐘合鳴」）が思い出深い，と述べてローデンバックのこの詩を引用している。

訳題の「田舎で」は，原詩の1行目〈En province, dans la langueur matutinale〉の冒頭部から。詩の中の一節〈Tinte le carillon〉は，「カリヨンが鳴りわたる」とそのままに訳し，この繰り返し句が心地よいリズムを作っている。先に述べた同じ詩の内藤濯訳「野の里の……」では，繰り返し句を「鐘楽(しようがく)は鳴りひびく」と訳し，「カリヨン」に「鐘楽」の訳語を当てている。

渡仏中に，収録詩集③，④，作品集⑫などを読む機会があったかもしれないが，この1編のみを取り上げていることから，⑦，⑪，⑭といったアンソロジーを典拠と考えることもできる。⑭*Bouquet de Roses*［佛蘭西小詩選］は，日本で編まれた原詩による詞華集で，入手しやすいと同時に，フラ

ンス詩 300 編を収め，当時，評判も高かったものと推察されるが，ラジオ講演が⑭の刊行（昭和 2 年 6 月 1 日）以前ならこれは除外されることになる。

大木篤夫「田舎の町に」　　『近代佛蘭西詩集』アルス　1928 年（昭和 3 年） 6 月 10 日

上記の西條八十の翻訳の翌年，詩人の大木篤夫（のち惇夫（あつお），本名・軍一）も同じく〈Du silence〉XXIV 章を訳出。リフレイン部分は「鳴りわたる　遠き鐘」と訳している。訳詩集の「書後」に，⑪を参照したとあるから，これが出典と見てよいだろう。

前田鐵之助「庭」　　「佛蘭西文學」第 2 巻第 8 号　1929 年（昭和 4 年） 8 月 1 日
　　「沈黙」「雲の誘い」「詩洋」 7 月号　第 7 年第 7 輯　1930 年（昭和 5 年） 7 月 1 日

「庭」は，*La Jeunesse blanche* 所収の〈Les jardins〉（ 4 行× 8 連）の訳。「沈黙」と「雲の誘ひ」（ 2 編）の訳題は，それぞれ〈「沈黙」より　XV〉〈「雲の誘ひ」より　II〉〈「雲の誘ひ」より　IV〉となっていて，〈Du silence〉XV 章（16 行），*Les Vies encloses* 所収の〈Les tentations des nuages〉II章（ 6 行），およびIV章（16 行）の翻訳。いずれも今日まで，他に翻訳はない。「庭」の第 1 連「忘れられた薔薇の子供の頃の庭々が／時折，古い本の中に甦へる。／其處には翼をたゝんで／死んだ大きな蝶が眠つて居る。」からもうかがえるように，平明で丁寧な訳である。

前田鐵之助の独立した訳詩は，これら 4 編にとどまるが，同じ「詩洋」 7 月号の誌上にローデンバック論の第 1 回を執筆している。「ジヨルジユ，ローデンバツハ㈠」と題し，この後， 9 月号，10 月号，12 月号と 4 回連載されて中断されている。合計すれば 26 ページにおよぶ。さらに 3 回の連載が予定されていたが完結せずに終わった。しかし，論は詩人の生涯にはじまり，『白い青春』『静寂の国』『眼の中の旅』『閉ざされた生活』の各詩集から，抜粋を含めて 20 余編の訳詩が引用されている。前田鐵之助は，論中，1913 年版⑨ *La Jeunesse blanche* を繙き，他の単行詩集も閲したような書きぶりだが，⑫，⑬の *Œvres de Georges Rodenbach* で大方の詩に眼を通していたのではなかろうか。

矢野峰人「廢都」「鏡」　　『志るゑっと』学芸社　1933 年（昭和 8 年） 9 月 18 日
　　「掌文」　　『譯詩集　黒き猟人』大木書房　1943 年（昭和 18 年） 9 月 15 日

「廢都」は，*Le Règne du silence* 所収の〈Paysages de ville〉XV 章（16 行），「鏡」は，〈Du silence〉V章（10 行），「掌文」は，*Les Vies encloses* 所収の〈Les lignes de la main〉II章（ 4 行× 4 連）の，それぞれの訳である。「廢都」と「鏡」の原題はいずれもローマ数字の章番号のみで，これは内容に即してつけられた訳題。

〈Paysages de ville〉XV 章は詩編「町の風景」の最終章だが，この後に原詩では三つの＊をそれぞれ冠して 2 編の 14 行詩が付されている。どちらも 12 音綴のソネット詩だが，行空けは行われていない。いずれにしても，これらは訳されていない。

「掌文」の原題〈Les lignes de la main〉は，手の筋，手相の意である。「掌文こそは世の人が生得の地理，／そは『無限』よりつらなれる幽暗の路，」と訳文は始まる。特異なテーマの詩編といえよう[27]。

『譯詩集　黒き猟人』には，短編 *Les Tombeaux*（1896）の訳も「墳墓」の訳題で収められてい

る。この訳詩集は，後年，大雅洞より再刊（昭和40年）[28] されている。

矢野禾積（本名）も上田敏訳「黄昏」によってローデンバックへと導かれ，やがて熱狂的に傾倒して行った一人である。韻文，散文の翻訳のほかに，評論「ローデンバツハ一面観」（大正4年）[29] では，原文，抄訳を多数引用してその詩世界を熱く論じる。論の末尾には『白き青春』など7編の代表作を列挙し，邦題，原題，出版年，ジャンルを示しており，ほとんどの作品に眼を通していたと考えられる。

青柳瑞穂「夕暮」「不在」　　「ゆうとぴあ」11・12月合併号　第1巻第3号
1946年（昭和21年）12月30日

Les Vies encloses 所収の〈Le soir dans les vitres〉V章（5行×3連），および *La Jeunesse blanche* 所収の〈L'absence〉（4行×2連）の訳。いずれも，後年，詩作と訳詩を集めた『睡眠前後』（昭和35年）[30] に再録。「不在」の1行目は，「私のゐない間に，不在はその仕事を終へてゐた。」と始まる。現代詩人でもある青柳瑞穂らしい訳しぶりである。

いずれの詩も詞華集などにあまり取り上げられていない。⑥ *Les Vies encloses* や② *La Jeunesse blanche* ないしは，⑫，⑬の *Œvres de Georges Rodenbach* にでも拠らないと出会うことはむずかしいと思われる。

齋藤磯雄「われと」「女人ら」　『近代フランス詩集』新潮社　1954年（昭和29年）8月10日

「われとわが手を……」は，*Les Vies encloses* 所収の〈Les malades aux fenêtres〉II章（6行・15行・11行）の訳で，タイトルは1行目の「われとわが手を病む人のをりふし飽かず眺むれば，」による。「女人らの雙の眼は……」は，〈Le voyage dans les yeux〉XVIII章（6行・11行・5行・3行・1行）の訳で，これもタイトルは1行目「女人らの雙の眼は過ぎ去りし幾春秋の」から。いずれも齋藤磯雄特有の絢爛な訳文である。

これら2編を両方とも収録しているのは作品集⑫，⑬の *Œvres de Georges Rodenbach* を除けば，詞華集では⑦ *Poètes d'aujourd'hui, 1880-1900, morceaux choisis* のみである。

安藤元雄「雨」「古い河岸」　　『世界名詩集大成3　フランス篇II』平凡社
1959年（昭和34年）7月4日

La Jeunesse blanche 所収の〈La pluie〉と〈Vieux quais〉（4行×8連）の訳。いずれもローデンバック詩の中でも名詩中の名詩で，撰集⑩，⑪，⑯で2編とも取り上げられている。「雨」は，前述のように内藤濯，鈴木信太郎および永井荷風の部分訳もあって，とりわけ日本で愛誦されている1編。「古い河岸」もよく知られているが，「夕暮が迫る　たとえようのない一刻」とうたい出すこの安藤元雄訳が我国では初訳である。

安藤孝行「たそがれ」　　『西詩唱和　葦の葉笛』白雲山房
1982年（昭和57年）1月20日

詩編〈Du silence〉II章（4行×5連）を各連ごとに5首の短歌に訳したもの。この詩にはすでに上田敏の名訳「黄昏」があるが，韻文訳にしたところに雅味がある。第1連は「ゆふされば／うす

にびの影／死のごとく／あのと忍びて／室(むろ)にこめけり」とある。

小浜俊郎「田舎では」「地方で」「日曜は」「水の心」
『フランス世紀末叢書 13　詞華集』国書刊行会
1985 年（昭和 60 年） 2 月 25 日

訳題の「田舎では……」「地方で送る日曜」「日曜はいつも」「水の心」は，訳詩の冒頭部あるいは内容の要約。いずれも *Le Règne du silence* から，〈Du silence〉XXIV 章，〈Cloches du dimanche〉XIV 章（22 行），〈Cloches du dimanche〉II 章（8 行・13 行・7 行），〈Le cœur de l'eau〉XII 章（20 行）を訳出したもの。「田舎では……」には，西條八十，大木篤夫の先訳があるが，あとの 3 編は初訳。

窪田般彌「小箱」「おお都市」　『フランス詩大系』青土社　1989 年（平成 1 年） 4 月 25 日

「小箱」は *Les Tristesses* から〈Le coffret〉（4 行× 4 連），「（おお都市よ……）」は *Le Règne du silence* から〈Paysages de ville〉XV 章を訳出したもの。「小箱」は，フランス，ベルギーのアンソロジーにはほとんど載録されている代表作で，日本で出た原語の詞華集⑭*Bouquet de Roses*［佛蘭西小詩選］にも入っているが，これまで邦訳はなかった。

「（おお都市よ……）」は，訳詩の 1 行目「おお都市よ，私にそっくりなわが妹よ」の冒頭を採って邦題としたもの。矢野峰人は同じ詩を「廃都」と題し「あはれ都會よ，なれこそは，われによく似し妹(いもと)なれ，」と始めている。

20 世紀初頭から始まった日本においてのローデンバック邦訳の流れは，滞ることなく今日まで続いている。本論ではその詩作品の我国における移入の実際をつぶさにたどったわけだが，なお明らかにすべき点は多い。広範な調査と受容の有機的な究明は継続されねばなるまい。とりわけ昨今，日本近代文学の研究が西欧からの摂取のありように向けられつつあるが，ローデンバック詩の受容史の解明はその一端を担うものである。ヨーロッパ文学の吸収が，わが国の近代文学にどのように滋養となって行ったかも，さらにこれを跡づけることで明らかになって行くであろう。

注

(1) 『明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》』（全 50 巻・別巻 2 巻）ナダ出版センター（制作）・大空社（発行）　1996 年 6 月 28 日～2001 年 5 月 30 日
　『明治翻訳文学全集《翻訳家編》』（全 20 巻）ナダ出版センター（制作）・大空社（発行）　2002 年 1 月 20 日～2003 年 7 月 17 日
　『大正期翻訳文学画像集成《雑誌編》』（全 6 巻 CD-ROM 版）ナダ出版センター（制作）・大空社（発行）　2003 年 12 月 17 日～2004 年 10 月（予定）
(2) 上田敏『海潮音』本郷書院　1905 年 10 月 13 日
(3) *Bruges-la-Morte*. Paris : Marpon et Ernest Flammarion, 1892.
(4) Feuilleton du Figaro（N° 35～39, 41～45）, 4～8, 10～14 février 1892.
(5) *Le Voile*. Joué à la Comédie-Française le 21 mai 1894. Paris : Paul Ollendorff, 1897.
(6) 村松定史『日本におけるジョルジュ・ローデンバック』芸林書房　1998 年 12 月 25 日

⑺　村松定史『静寂　ローデンバック詩集』森開社　1986年11月15日
および翻訳詩誌「フォーヌ」1号〜59号（1983年6月25日〜1992年4月25日）掲載の訳詩その他の拙訳は略した。
⑻　微幽子「白耳義文学」〔「帝国文学」第1巻第1号　大日本図書株式会社　1895年1月10日〕
⑼　上田敏「黄昏」〔「明星」巳歳第6号　東京新詩社　1905年6月1日〕
⑽　安田保雄（編）『海潮音　初版　附別冊海潮音原詩集』（近代文芸復刻叢刊）冬至書房新社　1976年8月15日
⑾　島田謹二「上田柳村の『海潮音』」『日本における外国文学（上巻）』朝日新聞社　1975年12月10日
⑿　上田敏「白耳義文学」『文芸論集』春陽堂　1901年12月11日
⒀　三浦仁「三木露風」吉田精一・分銅惇作（編）『近代詩鑑賞辞典』東京堂出版　1969年9月15日
三木露風「現身」（1912）への「黄昏」の影響を指摘している。
⒁　矢野峰人「海潮音の影響」中島健蔵・矢野峰人（監修）『近代詩の成立と展開』（増補新版）有精堂　1969年11月10日
⒂　村松定史「ローデンバックと上田敏」『明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》32』ナダ出版センター（制作）・大空社（発行）　1999年12月3日
上田敏は『春鳥集』（1905）中の1編「朝なり」の詩評でローデンバック詩と比して絶賛しているものの，「黄昏」の「明星」掲載は6月，『春鳥集』の刊行は同年7月であり，影響関係は考えにくい。
⒃　安田保雄（注釈者代表）『日本近代文学大系　第52巻　明治大正譯詩集』角川書店　1971年8月10日
「黄昏」の注釈中に，〈「うれたし」はなげかわしい。「小君に，『いとつらうもうれたくも覚ゆるに……』と宣ひたれば」（「源氏物語」空蟬）〉とある。
⒄　矢野峰人「海潮音・概説」中島健蔵・矢野峰人（監修）『近代詩の成立と展開』（増補新版）有精堂　1969年11月10日
⒅　内藤濯『形影集』白水社　1953年4月15日
⒆　永井荷風「花より雨に」〔「秀才文壇」第9巻第18号　文光堂　1909年8月〕
⒇　堀竜一「明治四十四年の荷風と白秋――「海洋の旅」と「わが生ひたち」をめぐって――」〔「新潟大学教養部研究紀要」第21集　新潟大学教養部　1990年12月25日〕
堀竜一は，永井荷風とローデンバックの接点を詳細緻密に論じ，〈La pluie〉の引用は⑪*Anthologie des poètes français contemporains*（*1866-1914*），Tome IIによると推定している。
(21)　村松定史「ローデンバックと上田敏」（前掲書）
(22)　蓼峯「『憂愁』と『古代』と『宗教』と」〔「帝国文学」第15巻第2号　大日本図書株式会社　1909年2月1日〕
(23)　矢野目源一「愛詩」『現代詩集・第1輯』アルス　1921年10月5日
(24)　島田謹二「上田柳村の『海潮音』」（前掲書）
(25)　Georges Rodenbach “Stéphane Mallarmé”, Le Figaro, 13 septembre 1898.
(26)　西條八十「外国の詩の話」〔「世界文学」4月創刊号　第1巻第1号　金星堂　1924年4月3日〕
(27)　Sakurazawa-Yukikazu『TE NO SUDI』YOMIGAERI NO IE　1922年（月日不記）
桜沢如一訳『手のすじ』は，〈Les lignes de la main〉全9章の全訳。ローマ字叢書の一冊として刊行。すべてローマ字表記で会員用200部限定という特殊なものなので本論では取り上げなかったが，矢野峰人の先行訳ということにはなる。
(28)　矢野峰人『譯詩集　黒き猟人』大雅洞　1965年10月（日付不記）
(29)　矢野禾積「ローデンバツハ一面観」〔「アルス」6月号　第1巻第3号　阿蘭陀書房　1915年6月1日〕
(30)　青柳瑞穂『睡眠前後』大雅洞　1960年10月（日付不記）

付　　記

本論の資料調査は，2002年度名城大学経済・経営学会研究助成によった。記して謝するものである。